

| | | | |
|-------|----|------|-------------------------|
| 18 | 豊田 | 堤小学校 | 氏名 タケダ リュウジ 武田 龍治 |
| 分科会番号 | 1 | 分科会名 | 国語教育（作文その他） |

研究題目

必要な情報を読み取り、取捨選択して、相手に分かりやすく伝えることができる子の育成

— 小学6年「町の幸福論—コミュニティデザインを考える」の学習を通して —

研究要項

1 主題設定の理由

本学年は、友達の意見を肯定的に受け止めたり、認めたりする姿が多くの児童に見られる。しかし、自分の意見や考えをもっていても言えなかったり、言えたとしても、相手に分かりやすく伝えることができなかつたりして、自分の意見・考えを表現することを苦手としている児童が多い。また、学習用タブレットなどを使って情報を集める活動をする、調べた言葉をそのまま使って説明したり、関係のないグラフや表を選び取ったりしてしまうことが多くある。5年「和の文化を調べよう」の学習では、グループごとに好きな和の文化について調べたことを発表ノートにまとめ、4年生に対してプレゼンテーションするという授業を行った。4年生に対して伝わる言葉を選んで説明しようとしている姿もあったが、調べた言葉をそのまま使って説明をしている班も多く、4年生の児童に対して十分に伝わっていない様子が見られる場面があった。その後5年総合的な学習「WE LOVE 米」では、今後の米作りに対しての提案をプレゼンテーションで行った。国語科「和の文化を調べよう」での反省を生かして、言葉もわかりやすく伝えられるように工夫をしていたが、発表をする中で資料を指し示したり、資料を比較したりするような工夫はできていなかった。

以上のことから、5年生での2度のプレゼンテーションの反省を生かし、相手に分かりやすく伝える力をつけたいと考えた。そこで、6年「町の幸福論—コミュニティデザインを考える—」の学習では、自分の意見を分かりやすく伝えるための資料を選び取ることや、自治区長をお招きすることによって自分たちの意見が伝わるように意識をもたせ、自分たちの意見を分かりやすく伝えられるような児童の育成を目指した。

2 研究の概要

(1) 目指す子ども像

- ・自分の伝えたいことに合わせた資料を選び取ることができる子。
- ・聞き手を意識して、伝えたいことが伝わるように表現を工夫することができる子。

(2) 研究の仮説と手立て

【仮説1】

・写真や資料から読み取れることや、写真・資料を筆者がどのような意図で使っているかを考える活動を行えば、自分が必要とする写真や資料を選び取ることができるようになるだろう。

手立て1 プレゼンテーションに適した写真や資料を比較し検討する学習

どのような写真や資料が適切であるかを考える活動を通して、提示された2つの資料を比較しながら、適切な資料を選ぶポイントを実感できるようにする。そして、教材で活用されている写真・資料はプレゼンテーションを行う上で適切かどうかを考え検討する活動を行う。

手立て2 適切な写真・資料を選び取る活動

写真や資料の内容を読み取る力を身につけられるように、スピーチタイムを利用して、文章に合った写真や資料を選び取る活動を繰り返し行う。

【仮説2】

・総合的な学習の時間で学習した福祉の視点と、自分たちの学区を組み合わせれば、自分の学区をより良くするためのアイデアを考え、それを実現してもらうために分かりやすく伝えようという意識が生まれるだろう。

手立て3 目指す姿を具体的にとらえるためのモデル学習

相手に興味をもってもらえる話し方をイメージできるように、YouTube 上にあるプレゼンテーションの動画を見たり、実際に話し方が上手なグループの班を分析したりして、プレゼンテーションに適切な話し方について考える時間を設ける。

手立て4 作成したプレゼンテーションを振り返る場の確保

班で作成したプレゼンテーションを改良できるように、資料・話し方それぞれに焦点を当てて、子ども同士で評価し合う活動を取り入れ、より良いプレゼンテーションができるようにする。

手立て5 意欲的にプレゼンテーションが作成できるような班の編成と場の設定

児童が意欲的に地域のことについて考えられるように、クラスを解体して、通学団でグループを作り、相手意識がもてるよう、実際のプレゼンテーションをするときには自治区長を招いた発表の場を設定する。

(3) 抽出児童について

| | 実態 | 期待する姿 |
|------|---|--|
| 児童 A | 普段からどの授業も自分の意見をもつことができる。スピーチタイム「写真をうまく活用しよう」では、選ぶ基準が分からずに迷ってしまい、最後まで写真を選び取ることができなかった。 | 自分が伝えたいことに適した資料を見つけられるようになってほしい。そのために、どのような要素が必要か考える時間を設ける。また、写真を選択するトレーニングを重ねて、取捨選択の感覚をつかめるようにする。 |
| 児童 B | どの授業にも積極的に参加し、発言することが多い。スピーチタイム「第1回提案王！」では、話すことに精一杯で原稿を見て話しており、周りを見たり、スライドを指し示したりすることができなかった。 | 話すときに、周りの反応を見たり、スライドを指し示して説明したりできるようになってほしい。そのために、周りを見ることやスライドを指し示すことによる良い効果を実感できる活動を取り入れる。 |

3 単元構想図（別紙参照）

4 実践内容

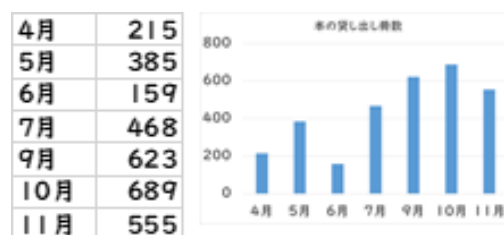
(1) プレゼンテーションに適した資料の比較（手立て1）

児童 A は、単元に入る前に行った写真を選ぶ活動（スピーチタイム）において、選ぶ基準が分からず、最後まで選べずに終わってしまった。そこで、資料を選ぶ際の基準を明確にする授業を行った（学習活動⑤）。まず、プレゼンテーションで使う資料で大事なことは「ぱっと見で分かること」ということを、スライドの時間の短さをもとに確認した。次に2つの資料を比較し、どちらがより短時間で伝わるか話し合い、資料を選ぶポイントとして、次の5つにまとめた。

- ・ 大事なところが伝わるようにする。
- ・ 変化が分かるようにする。
- ・ 情報に合わせてグラフの種類を選ぶ。
- ・ 目的に合わせて表やグラフを選ぶ。
- ・ 伝わりやすい図を選ぶ。

2つの資料を比較することで、児童たちはプレゼンテーションに適した分かりやすい資料のポイントを実感することができた。（資料1）

資料1 ポイントを実感するために、比較した2つのグラフ



資料2 児童Aのふり返り

資料を選ぶポイントは、ぱっと見で分かるものを選ぶこと、写真は伝えたいものが大きく真ん中にあり、余分なものがないものを選ぶと良いことが分かった。

写真については、1枚の写真を見せ、どのような写真が伝えたいことが一番伝わりやすいかを考え、以下の3つにまとめた。

- ・伝えたいものが大きくあること。
- ・伝えたいものが真ん中にあること。
- ・余分なものはできるだけ入れないこと。

授業後のふり返りで、児童Aは資料2のように書いており、資料や写真を見るポイントを理解することができたといえる。この授業を生かして次時に教科書にある資料がプレゼンテーションで伝わりやすい資料かどうか考える活動を行った（学習活動⑥）。教科書にある本文とそれについての写真・資料が伝わりやすいものか前時のポイントを参考に考えていった。児童Aは資料3の比較では、本文と写真を照らし合わせて、「伝わりやすい資料だと思わない」と選択した。その理由には、「見学ツアーのことや運営に至るまでの様子が分からないから」と記述した。本文にある内容が写真に反映されていないところが伝わりにくいと感じた様子だった。資料4の比較では、「伝わりやすい資料だと思う」を選択し、「文章だけだと分かりにくいけれど図を使うことで分かりやすい」と記述した。図で表すことで相手に伝わりやすいことを理解している様子だった。そして、この授業のふり返りには「資料をよく見ると、本文に合っているものと合っていないものがあることが分かった。」と記述した。このように、資料と文章を見ながら必要な情報があるかどうか、それが伝わりやすいかどうかを考えることができた。

これらのことから、プレゼンテーションに適した資料を選ぶ基準を自分の中でもつことができるようになり、手立て1は有効であったといえる。

(2) 適切な写真・資料を選び取る活動（手立て2）

プレゼンテーションに適した資料を選ぶポイントを学習した後、朝のスピーチタイムを活用して、資料を選び取るトレーニングを行った。

始めに、「文章に合った資料を選ぼう」という活動を行った。事前に教師が文章を作成しておき、それに適した写真を選ぶ活動である。1回目の文章は、「みなさん、もうすぐ卒業ですね。卒業式の日、このように桜が咲いていたら嬉しくないですか？」である。この文章に合うように児童Aが選び取った写真が資料5である。理由を聞くと、「桜がきれいに咲いているのと、卒業式が分かる写真がいいと思ったから」と答えた。

2回目の文章は、「こちらをご覧ください。これは海の中から撮影された写真です。きれいですよね。きれいなポイントは、やはり空から光が差しているところでしょう。光の線が海底に向かって指しているところが神秘的だと思わせてくれます」である。この文章に合うように児童Aが選んだ写真が資料6である。その理由は、「光が海底に向かったさ

資料3

資料①
一つ目の写真は、持ち物である粉本紙を丁寧にまとめるという様子である。この写真では、班長による作業指示だけでなく、班長の手に沿って作業を行う様子も写っている。班長の指示に従って作業を進める様子も写っている。班長の指示に従って作業を進める様子も写っている。



〈理由〉
見学ツアーのやっている場面がなく、ただ見ているだけだし、運営に至るまで市民自らと書いてあるけど、観客のように見学しているから。

伝わりやすい資料だと… 思う

思わない

資料4

資料③
従来のイメージを持つときの方法として、バックキャストイングという考え方があり、これは、まず未来をえがき、その未来から現在をふり返って、今やるべきことを見つけていくというものである。タイムマシンを使った事例を一つしようかしよう。



〈理由〉
文章だけだと分かりにくいけど、矢印など図を使いながら書いてあるし、短くまとまっているから。

伝わりやすい資料だと… 思う

思わない

資料5 児童Aの選んだ写真



理由：桜がきれいに咲いているのと、卒業式が分かる写真がいいと思ったから

資料6 児童Aの選んだ写真



理由：光が海底に向かって指しているところが分かってきれいだから

しているところが分かってきれいだから」と答えた。2回の活動ともに、文章の内容が伝わりやすい写真を選ぶことができ、選んだ理由も説明できるようになった。

次に行ったのは、「文章を作ってそれに合う資料を1枚選ぶ」という活動である。今回は、自分の意見を明確にして、その意見に説得力をもたせる資料を、教師が事前に集めておいた資料の中から1枚だけ選ぶというものである。話題は、「犬を飼いたいですか飼いたくないですか」で行った。児童Aは飼いたくないと選択し、理由に「お金がかかるから」と書いた。その後、その理由に対しての資料7を見つけることができた。このようなトレーニングを行ったことで、自分の伝えたいことに適した資料を見つける力を付けることができ、手立て2は有効であったといえる。

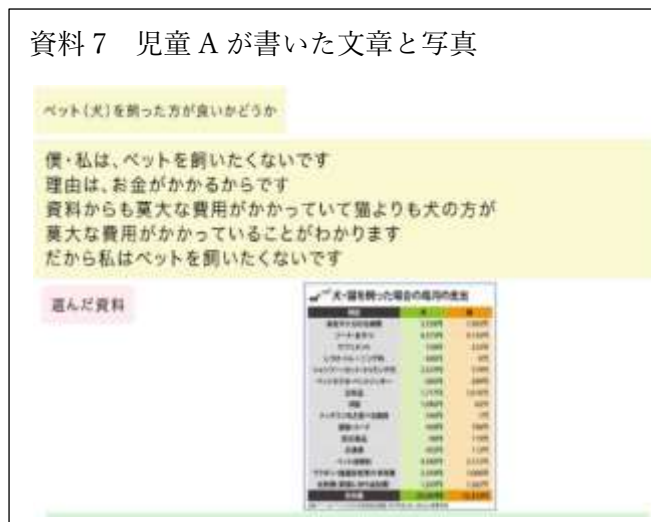
(3) 目指す姿を具体的にとらえるためのモデル学習（手立て3）

昨年度の授業では、「紹介」する方法としてプレゼンテーションを行っていた。そのため、児童はプレゼンテーション＝紹介という認識でいた。そこで、今回の目的は「紹介」ではなく、「提案」だということを導入時（学習活動①）に確認をした。その後、提案するプレゼンテーションはどのようなものなのかをイメージできるように、YouTube上にある小学6年生が行っているプレゼンテーションを視聴した（学習活動②）。視聴した後、多くの児童が、「すごい」「自分と全然違う」というような呟きをしていた。児童Bはこの授業の振り返り（資料8）に「プレゼンテーションのポイントもやるけど、他に、アイコンタクトとかにも挑戦できたらいいなと思います」というように書き、プレゼンテーションに対しての意欲を高めることができた。

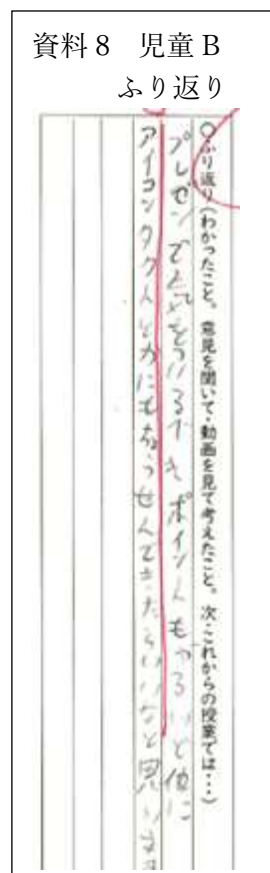
その後、話し方に焦点を当ててポイントが考えられるように、全班で教師作成の原稿・スライドを使ったプレゼンテーション大会を実施した。原稿・スライドが同じ中で、どのように話し方を工夫すれば相手に伝わるかを班ごとに考え、競い合う活動である。児童たちは各々、「声を大きくしよう」と言ったり、スライドをどのタイミングで出すかメモをしたりと、工夫を凝らして取り組んでいた。児童Bがいるグループでは、問いかける、言葉に強弱をつける、ジェスチャーをつけるという3つの作戦を立てて発表に臨もうとしていた（学習活動⑦）。

各班が発表した後、相手に伝わるようなプレゼンテーションの話し方としてどのようなことが大切かを考える時間を設けた（学習活動⑧）。ここでは、全員が行ったプレゼンテーションで特に上手な話し方ができていた児童を集めて選抜チームを作り、その人たちで行ったプレゼンテーションから伝わる話し方のポイントを見つける活動を行った。実際に自分達も行ったプレゼン

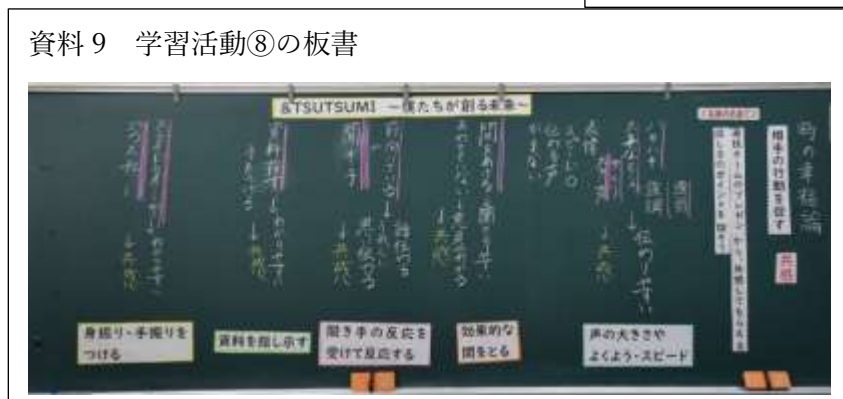
資料7 児童Aが書いた文章と写真



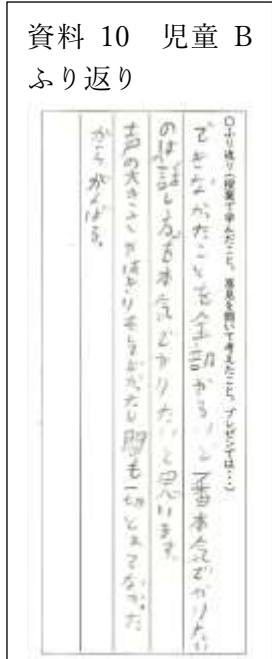
資料8 児童B
振り返り



資料9 学習活動⑧の板書

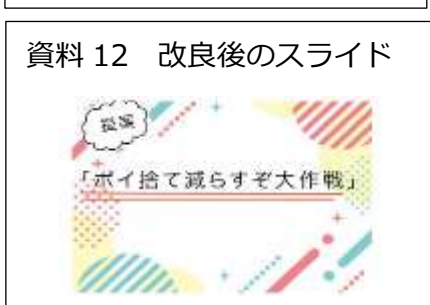
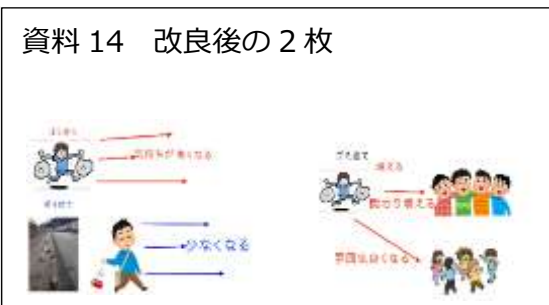
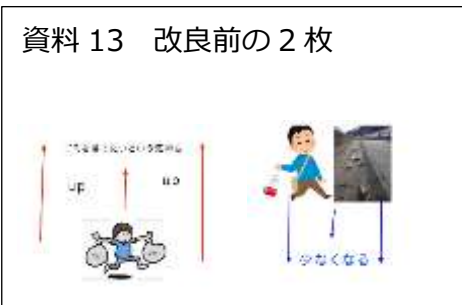
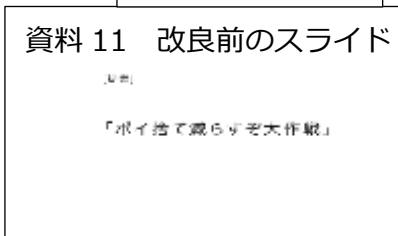


テーションを使って比較しながら考えることで、実感しやすいだろうと考えたためである。児童Bは、動画を真剣に視聴し、班員が呟いたことも一生懸命書き出していた。その後クラス全体で良い部分を出し合い、それがなぜ伝わりやすいのかということを考えていった(資料9)。話すときのポイントを考えた後、もう1度自分たちのプレゼンテーションを見て、何ができていなかったかを分析する時間を設けた。児童Bは自分たちの班の発表をふり返り、「声の大きさ・よくよう・スピード」、「聞き手の反応を受けて反応する」の項目には△、他の項目には×をつけた。班員が「ジェスチャーはつけられていたじゃん」と声をかけられても、「いや、これだけじゃだめだと思う。」と評価をつけていた。さらに、ふり返りでは、「話し方を本気でやりたいなと思います。」と書いていた。(資料10)このことから、児童Bの中で、プレゼンテーションでの話し方に対する意識が高まり、手立て3は有効であったといえる。

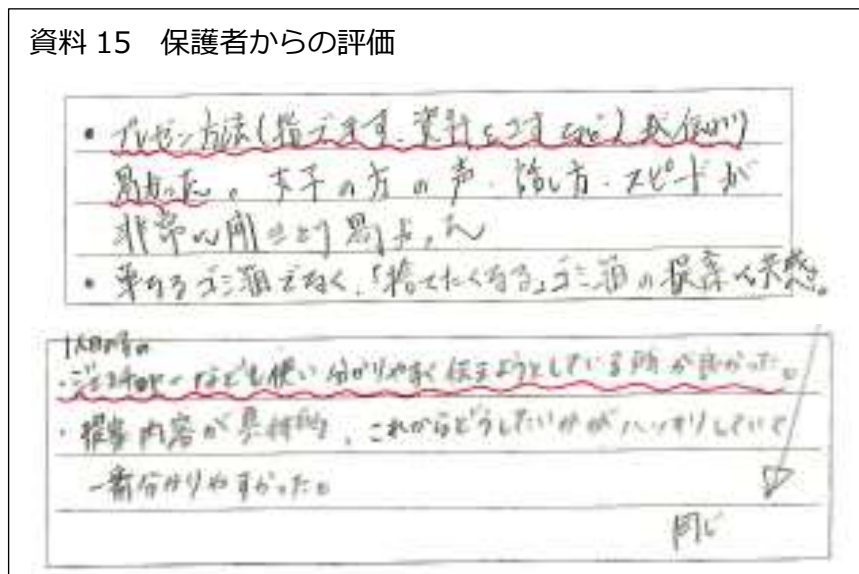


(4) 作成したプレゼンテーションをふり返る場の確保(手立て4)

自分たちが作成したプレゼンテーションがよりよいものとなるように、グループ同士でプレゼンテーションを見合う時間を2回設けた。1回目は、資料が見やすいかどうかや内容と合っているかどうかについて注目する時間、2回目は相手に共感してもらえる話し方であるかどうかについて注目する時間とした。児童Bのグループでは、1回目で見合ったときに提案内容をわくわくするようなスライドにするとよいということや、大事なところが分かりにくいというアドバイスももらった。このアドバイスを参考にして、次時に資料12・14のようにスライドを改良することができた。



そして、2回目に見合ったときには、声の大きさは良いと言ってもらえたが、原稿を見ずに相手を見て話すと言ったアドバイスももらった。言ってもらった後に児童Bは、「オッケー、オッケー、よし」と言いながらメモを取る様子があり、課題はあるものの、自信がついた表情をしていた。発表当日、もらったアドバイスを受け修正し、発表したところ、保護者から資料15のように「ジェスチャーなどを使い分かりやすく伝えようとしているところがよかった」など話し方の工夫を評価するもらうことができた。



実際に聞いてもらいアドバイスをされたことでスライドが改良できたこと、児童Bの自信につながったということから、手立て4は有効であったといえる。

(5) 意欲的にプレゼンテーションが作成できるような班の編成と場の確保(手立て5)

今回の授業では、これからも自分たちがこの地域に住みたいと思うためにどんな取組をするとよいかという内容でプレゼンテーションを作ることにした。そのためにはどのようなグループで考えるとよいかと問いかけたところ、地区ごとで考えたいと児童から意見が出たため、クラスを解体して通学団ごとでグループを形成した。また親や先生だけではなく、区長や市議会議員にも聞いてもらいたいという児童の意見から、区長や市議会議員を招いて発表するという場を設定した。児童は「本当に?」「緊張する」という言葉を発していたが、表情からはやってやろうという気持ちが伝わってきた。児童 B は緊張すると最初は言っていたが、授業を重ねると「楽しみ」と言うようにもなった。スライドを作成する際に、「今回は大人に見せるから」と難しい表現を使うことや、「少しゆっくり話したほうが聞き取りやすいかな」などと、聞き手を意識してプレゼンテーションをしようとする姿が多く見られた。このように、児童の意欲を高められたことや相手を意識付けられたことから手立て 5 は有効であったといえる。

6 研究の成果

(1) 仮説 1 について

手立て 1 では、プレゼンテーションに適した資料のポイントをまとめたことで、資料を見る基準ができ、文章に合わせた資料を見つけることができるようになった。児童 A の様子から、教科書の資料に対して不十分なところを書くなど、写真・資料を見るポイントが明確になったといえる。

手立て 2 では、最初は文章に合う写真が見つからない児童もいたが、何度も練習を繰り返すうちに適切な資料を選べるようになっていった。レベルを上げて自分が書いた文章に適した資料を選ぶ活動でも、文章に合う資料が選べていた。児童 A も、選べないということはなく、理由も添えて資料を選べるようになっていった。以上から、手立て 1、2 は有効で、仮説 1 は妥当であったと考える。

(2) 仮説 2 について

手立て 3 では、目指す姿として初めに YouTube 上にあるプレゼンテーションを視聴することで、今回行うプレゼンテーションの姿がイメージでき、意識が高まっていったといえる。その際、同じ小学 6 年生を選択したことも有効だっただろう。さらに、自分たちが行ったプレゼンテーションを、同じ学年の上手な児童と比較したことで、どこがよいのか見つける活動もより意欲的に取り組むことができたといえる。これにより、児童 B は話し方に対していつも以上に高い意識をもって取り組むことができた。

手立て 4 では、お互いにプレゼンテーションを見合い、アドバイスを送り合ったことで、客観的に自分たちのプレゼンテーションを振り返ることができたといえる。また、「資料を見る」「話し方を見る」と視点を絞って取り組んだことで、より具体的にアドバイスをすることができ、スライドや話し方を細かく修正できた。

手立て 5 では、授業の始めに誰に見せたいか確認し、それを実現したことで子どもたちの意欲を高めることができた。またクラスに限定せず、通学団ごとで班を形成したことで自分たちの地域をより深く見直すことができ、自分事として取り組むことができた。

以上から、手立て 3、4、5 は有効で、仮説 2 は妥当であったと考える。

7 今後の課題

本単元では、必要な情報を取捨選択し、相手に分かりやすく伝えることができる子の育成を主題として研究を進めてきた。資料の取捨選択については、プレゼンテーションの資料として適切なものをクラス全体で考え、それが選べるようにトレーニングを繰り返したことで力が着実に身につけてきたことが感じられる。一方、話すことに関しては、意識してできる児童となかなかできない児童の差があると感じている。意識できる児童については、モデル学習や振り返りの時間を使い、練習を重ねるごとに上達していく姿が見られた。本番でも練習の成果を発揮し、見ている人からも良い評価をもらっていた。しかし、意識ができない児童は、上達はしているものの、本番になるとうまくできないなど成果が十分に発揮できなかった。視覚的にわかるように掲示をしたり、発表する場を増やして経験を積んだりする活動を用意するとさらに効果があったのではないかを考える。今後も、児童が意欲をもって取り組めるようなテーマ・課題作りを考え、そこからのように力を身に付けられるかを吟味できるように今後も授業研究に励んでいきたい。